

# 小児がんの子や家族 一服して

小児がんの子どもや家族らが安心して、話したり、相談したりできる場を……。そんなサロン「いっぽく亭」をNPO法人が千葉県緑区の県子ども病院で開いている。毎週火曜日、コーヒーを飲みながら、子どもが小児がんを経験した親2人が相談相手になっくれる。小児がんでこうした取り組みは全国的にも珍しいという。「ぶらっと来て、肩の荷を下ろしてほしい」と話す。

## 県子ども病院でNPOがサロン

12月のある火曜日。白血病の治療で入院中の県内の中学2年の女の子が母親(37)と一緒に顔を出した。病院を訪ねるプロ野球選手夫妻への贈り物として、赤と茶色のペアの革製小銭入れを病棟で作った。スマー

トフォンの写真を見せ「赤は私がぬったの」と女の子。「すごい」と驚く相談員に一つひとつ説明した。入院中の病棟は、中学生より幼い子や同年代がいて、も男の子だという。相談員は母親より年配の女性もい



小児がんの女の子(手前)と談笑する小児がん経験者の親たち(県子ども病院)

## 毎週火曜 仲間と話し合える場

るが「人生の先輩だし、グチを聞いてもらってすっきりする」と話す。

運営するのは、小児がんの家族らでつくる認定NPO法人「ミルフィユ小児がんフロンティアーズ」

(<http://www.millefe.nile.or.jp>)だ。前身の任意団体を含め1997年から、県子ども病院を中心に、治療中の子どもたちに楽しい時間をと院内での運動会や流しそうめん、院外でのキャンプなどを催したり、患者・家族と医師・看護師らが参加する院内茶話会や年1回の院外茶話会を企画したりしている。

国内で毎年新たに2千〜2500人が小児がんと診断される。県内には600人を超す患者がいる。現在では70〜80%が治るとされるが、成長に伴い、がんそのものの影響や、薬や放射線などの治療による「晩期合併症」を長期間フォローアップする必要がある。

学校や社会に戻った時に学校生活や就職、恋愛などで不安になっても、周りに相談できずに孤独感を覚えたり、体の異変を覚えても医師らに相談をためらったりする小児がん経験者は少なくないという。

こうした状況に同NPOの井上富美子理事長(71)が「予約しなくても、用事が

なくてもいい。仲間と会っていっぽくできる場所をつくれないうか」と県子ども病院に提案した。

副看護局長で、こども・家族支援センターの山岸隆子さんは「退院後の患者と家族の様子を知ることができ。不安や困りごとを手引きしてもらい、医師や看護師らと共有して支援できれば」と相談業務の一環として快諾。9月かから、いっぽく亭が始まった。

対象は小児がんの患者・家族で、外来治療・経過観察中の人も利用できる。

子どもが脳腫瘍で入院中の女性(44)は「いまは治療で精いっぱい。でも、ママ友に言えないことも話せて気分転換になる」。

中学2年の娘と訪れた母親は「思春期になり対応が難しい。病気や治療で知りたいことがあると娘に言われたときどうすればいいのかわ、経験を聞けて助かる」。

県子ども病院では「将来的には回数を増やし、がん以外の病気にも広げられたら」と話している。

毎週火曜日午前10時〜午後4時。年内は終了し、新年1月9日から再開する。コーヒー1杯50円。問い合わせは同病院(043・292・2111)へ。